

氏 名	とう や まもる 東 谷 護
学位(専攻分野)	博士 (人間・環境学)
学 位 記 番 号	人 博 第 269 号
学位授与の日付	平成 17 年 3 月 23日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 1 項 該 当
研究科・専攻	人 間 ・ 環 境 学 研 究 科 文 化 ・ 地 域 環 境 学 専 攻
学位論文題目	新たなるポピュラー音楽文化の創出 ——占領期日本の進駐軍クラブにおける「アメリカ」との対峙——

論文調査委員 (主 査) 教授 高 橋 義 人 教授 松 島 征 助教授 田 邊 玲 子

論 文 内 容 の 要 旨

本学位申請論文は、第二次世界大戦後の日本におけるポピュラー音楽文化の基盤を作った場としての占領期日本の進駐軍クラブに注目し、米兵相手にバンド演奏等米国風エンターテインメントを提供した日本人関係者の活動を跡づけたものである。異文化との対峙と受容、そして独自のシステムを発展させるに至った具体的状況、それが後の日本のポピュラー音楽産業の発展に与えた影響などを考察することによって、戦後日本に大きな刻印を与えたアメリカナイゼーションに音楽社会学の立場から迫っている。

まず序において、本論展開のための前提が提示される。本論で言われるポピュラー音楽文化とは、音楽テキストに限らず、興業システムなど、それを支える構造をも含意する。音楽学においては西洋芸術音楽を基準とする観点が支配的であったため、ポピュラー音楽は長らく学術研究の対象とは認められてこなかった。その後、民族音楽学や社会学的アプローチによって地域的特色や社会状況を絡めた研究が行われるようになったものの、ポピュラー音楽研究は特定ジャンルの単線的発展史にとどまりがちであったという問題点が示される。それに対して戦後日本のポピュラー音楽の曙に正面から取り組んだ本論では、ポピュラー音楽の普及をアメリカの占領政策の一環として捉えうのかというような、いわばマクロの観点からではなく、オフリミットへの出入りを許された日本人たち個々のアメリカ文化との対峙を明らかにするというミクロの視点から、日本のアメリカナイゼーションの過程を逆照射する試みである。進駐軍クラブにおける日本人の活動については、資料が散逸しており、当時を知る人も少なくなっている。そのような状況のもと学位申請者は、当時進駐軍クラブと関わり、なおかつ戦後日本のポピュラー音楽産業を支えてきた人物たちとのインタビューを行い、本論文をこの領域におけるいわば貴重な一次資料の補強を目指すものとして位置づけている。

第1章「米軍が日本に与えた音楽的衝撃」は、近代日本の洋楽受容の歴史において軍楽隊が果たした役割を確認し、進駐軍クラブで音楽活動を行った日本人に軍楽隊出身者が多かったという事情を歴史的に考察する。さらに進駐軍クラブの誕生の経緯およびその経営方法を詳らかにし、日本人が関わる余地がいかに作られていったかを示す。さらには、与えられた秩序の中で人々がいかに異文化に向き合い、生き延びる努力をし、成功を収め、あるいは淘汰されていったか、その過程を仔細に跡づける。

第2章から第4章までは、演奏者、仲介業者、従業員として進駐軍クラブでの仕事に従事した人物たち自身の著書、インタビュー記事、そして学位申請者自身が数年間かけて直接行った聞き書きに基づき、敗戦時の印象、戦勝国や戦争に対する思い、進駐軍クラブでの仕事に従事するようになったきっかけ、異文化体験の衝撃、実際の仕事の内容および順応の経過やアメリカ兵らとの交流等を具体的な事例を踏まえて明らかにしている。演奏者の場合には、敗戦で職を失った軍楽隊出身者のジャズ転向や、軍楽隊出身以外の人物がクラブに進出した経緯、世間による評価の問題、未知のジャンルの受容と演奏技術向上のための苦労、実際に演奏された曲、仕事獲得のための手だてなどの事情が明らかにされる(第2章)。仲介業者については、そもそも進駐軍クラブに芸能者を仲介する事業がどのようにして生まれたのか、それがどのようにして個人業か

ら会社組織に発展し、いかなる実践がなされていたのかが、ある会社を例にして具体的に示される。また「拾い」という形態を明らかにし、あるシステムが確立する時の過渡的現象として「拾い」が一時期出現して消えていった事情を考察する(第3章)。さらに、芸能関係者とは別に、バーテンダーなどの従業員として進駐軍クラブに関わった人物たちを取り上げ、米軍施設内で働くことの意味を探索。この関連では、クラブが密集していた横浜を取り上げ、ケース・スタディを行う。まず占領時の横浜の状況を提示し、「ゼブラクラブ」を例に、進駐軍クラブの日常を描き出し、日本人従業員がアメリカ的サービス業のノウハウを身につけていった過程を追う(第4章)。

以上を受けて第5章では、進駐軍クラブで日本人が獲得した新しい音楽、演奏技術、興業形態等が、戦後日本のポピュラー音楽に与えた影響が論じられる。占領期が終結し進駐軍クラブの数が激減すると、オフリミットで仕事をしていた日本人たちも日本人を相手に活動せざるをえなくなり、その結果、クラブで培われた経験が大量消費商品としてのポピュラー音楽文化の整備発展に決定的な役割を果たすことになった。それが音楽面のみならずシステム面にも及ぶ全般的なものであったことが、歌謡曲の音づくりにクラブでのバンド演奏の実践が反映された事情や、仲介業者が興業主として独立したり、あるいはプロダクションを設立してタレントの養成や著作権の管理等を行ったりした経緯などが示されて、明らかにされた。

以上の研究成果を踏まえて結語では、全体をまとめると共に、たとえば同様に進駐軍クラブを抱えるなど類似の条件を持つ他の文化地域との比較研究の可能性など、さらなる展望が示される。

論文審査の結果の要旨

本学位申請論文はポピュラー音楽研究に属する。ポピュラー音楽が学術研究の対象として認知されるようになったのはごく最近のことであり、1981年の国際ポピュラー音楽学会設立によって、ポピュラー音楽研究は独自の学問領域として確立されるようになった。この領域はその後、主にイギリスを中心にして発展し、日本では1990年に学会が設立された。本学位申請論文はこのような若い学問領域における研究成果を問うものであり、新たな知見を提示すると同時に、この領域におけるこれからの発展の礎ともなるものである。

本論文の特徴はまず、ポピュラー音楽文化を音楽テキストそれ自体としてだけでなく、それが分配されるシステムをも含めて幅広くとらえ、占領期の進駐軍クラブという特殊な場が戦後日本のポピュラー音楽文化に対して果たした役割に注目した点にある。その上で、明治以来現代に至るまでの洋楽受容史において、戦中・戦後の一時期に大きな断層があり、それが日本のポピュラー音楽文化の展開にとって決定的な意味を持つことを明らかにしており、この点で本論文は画期的意義を有している。進駐軍クラブという場は、敗戦後の日本に日本人立ち入り禁止の領域として設置されたオフリミット内で、日本人がホストとして米国風に米兵を客としてもてなすという、捻れた関係の上に成り立っていた。そのような場が、それに関わった日本人に対して、戦時中禁止されていた未知の音楽を受容するのみならず、演奏スタイルや仲介業のノウハウ、また演奏空間の演出法などを学びかつ洗練する機会を与えることになった。進駐軍クラブで活動した人々は、その後占領期の終了に伴ってオフリミットの外に出て、身につけた技術なりノウハウなりを活かして日本人相手のポピュラー音楽産業に携わることになる。たしかにこれは周知の事実ではあるが、本論文の出色は、漠然とした印象で語られてきた事象の内実を検証するために、もう一度その時代に立ち戻って実際の状況を具体的に再構成した点にある。学位申請者はそのために、当時進駐軍クラブと関わった人物たちに対して、単なる思い出話ではない体系的な聞き書きを行って、彼らのなまの思いと体験を探究した。日本人の活動の実態については学位申請者自身のインタビューによって初めて明らかにされた点が多いし、さらには楽譜集の再現を行ったり当時のクラブの写真も手に入れたりするなど、占領時日本の学術的研究を行うための基盤となる一次資料を掘り起こしている。その功績は高い評価に値する。

占領期の研究は数多くあるものの、進駐軍クラブの運営の実態や、クラブでの日本人によるポピュラー音楽の実践を対象にしたものはほとんどなく、当時を知る人の数も減り、資料もかなり散逸している。そのためこの貴重な歴史的現実、忘却の危機に瀕している。そうした現状認識のもと、本論文は経済的事情からであれ、音楽に対する愛着からであれ、あるいは英語が話せたための偶然によるのであれ、「アメリカ」と関わることになり、それを生業としていった人々の職業生活を再構成することによって、戦後日本のアメリカナイズーションの一面を、ミクロな視点から見事に浮き彫りにしている。戦後日本のアメリカとの関連はさまざまに論じられるが、学位申請者の立場は、たとえばアメリカによる一方的な文化占領

といったマクロな観点から現象を分析するのではなく、この時代を生きた人々の生活の次元に立ち戻り、実際に「アメリカ」と対峙せざるを得なかった人々が、戦後生き抜くためにいかに「アメリカ」を受容し、加工し、新たなシステムを構築したか、すなわち、いかに「アメリカ」を利用していったかを、ポピュラー音楽を例にして示すことにある。それにより、マクロな観点からでは見落とされがちな現実をすくい上げた、すぐれた民族誌的・社会史的研究にもなっている。また、異文化摂取を論じる際につねに問題となる「正統性」の検討も、学位申請者の目的の一つである。正統性とは、起源の原型を維持することにより保証されるものではなく、受容された文化内の新たな文脈で考察されるべきことが、進駐軍クラブを経由しての日本におけるジャズの受容と発展を例に論じられている。

本学位論文は、本研究科の調査委員3名に2名の専門委員（社会学、日本音楽史）が加わって審査された。当初提出された論文に基づいて2004年6月11日、論文内容とそれに関連した事項について公聴会を開催し試問を行ったが、この場では、緻密な調査にもとづくこの論文の資料的価値が高く評価された一方、当時の具体的な状況を歴史的に把握する理論的視点の弱さが指摘された。そこで公聴会では、この論文は合格と認めるが、より良いものに仕上げるために、指摘された点を補い修正したものを調査委員会で再度検討する、という手順を踏むことで合意した。その後、改稿論文の提出を受けて、持ち回り委員会を含めて数回にわたって調査委員会を開き、論文を審査した。その結果、公聴会で指摘された諸問題は見事に払拭され、格段に優れた論文になったと認められた。本論文は、ポピュラー音楽研究のみならず、戦後日本の文化史研究にも新たな貢献をなすものである。また、文化・地域環境学に関わる独自の学際的研究をめざして創設された文化・地域環境学専攻ヨーロッパ文化環境論講座にふさわしい内容を備えたものと言える。なお本論文は、みすず書房で公刊される予定である。

よって、本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、2004年6月11日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。